

市大に求めるもの・
求められるもの



工学研究科・工学部 日野 泰雄

読んでみる アンロソの記事 役立つか

合格・入学、そして学生生活を経て社会に出るまでに市大で何が得られるのか、そのために逆に求められるものは何か、いくつかのキーワードとともに書き連ねてみたいと思います。是非最後まで読んで、何か一つでも気にとめる内容を見つけて、そして考えてみてくれることを願っています。

手に入れた 市大ブランド どう活かす

同じ新入生でも、初志貫徹、第一志望で合格した人、センター試験の結果でやむを得ず進路を変更した人、諦めかけていたのにサプライズな結果だった人、等々いろいろな人がいるはずです。それでも、みんな同じ市大ブランドを背にすることになります。そのブランドは、大学の教育理念、教育環境、そして個々の講義であり、市大としての個性そのものです。そして、それをどのように自分のものにするかで、市大ブランド

アンロソ Un roseau

総合教育科目ガイドブック

No.8

タイトル“Un roseau(アン ロソ)”
—— 一本の葦 —— について

B.Pascal (1623 - 1662) は、一人一人の人間の存在を一本の葦に例えました。
葦は河岸や湖岸などの水辺に生える、ススキに似た植物です。
その存在は真にはかなく、人も同様で、その存在はきわめてはかないものであると……。
しかし、Pascalは言うのです。

L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant.
(ロム・ネ・カン・ロソ、ル・プリユ・フェブル・ドウ・ラ・ナトゥール、メ・セタン・ロソ・パンサン)

人は一本の葦に過ぎない。自然界でもっとも弱いものだ。しかしそれは考える葦だ。

人間は水辺の一本の葦のようにはかない存在ではあるのだが、
考える(思考する、思想する)という行為によって有形の現象の世界(形而下の世界)のみならず、
その奥にある広い広い世界(形而上の世界)を知ることができる存在なのだ。
Un roseauとは「あなた」のことなのです。

深く考える
葦になろう



法学研究科・法学部 浅田 和茂

流れに棹さすことなく

「流れに棹さす」というのは、たまにテレビのクイズ番組にも登場する、間違いやすい熟語の代表例です。『広辞苑』によれば、正しくは「棹を使って流れを下るように、大勢のままに進む」という意味であり、「誤って、時流にさからう意に用いることがある」とされています。流れに棹さして生きていければ、それに越したことはないかもしれません。

新入生の皆さんには、これから大学において(何学部)に属するかを問わず、自らの人生や世界について深く考え、近い将来、日本社会および世界を担っていくことが期待されています。日本社会は、この60余年の間、戦後復興の後、著しい経済発展を遂げ、ついにはバブル崩壊を経験するなど、大きな変動を伴いつつも、比較的平和で安定した状態を維持してきました(このまま続けば、将来「バクス・ジャパーナ」と呼ばれるようになるかもしれません)。しかし、いまや時代は大

に個人の色が織り込まれることになり。皆さんにも、充実した大学生活をベースに、それぞれに相応しい個性ある市大ブランドを是非とも育てて欲しいものです。

激戦後 クールダウンでリスタート

受験戦争の弊害が問題視され、改革の切り札として導入された共通一次試験とさらにセンター試験への移行だったわけですが、結局は入試の時期をひと月早めただけで、TVでは相変わらず予備校の年越し講座が放映され、いかにも受験生を煽るかのような状況は解消されなまま現在に至っているようです。そんな中、ようやく手にした合格通知。その感激はひとしおですよね。だからこそ、一気に開放感が押し寄せることは当然のことでしょう。しかし、五月病や燃え尽き症候群を例にするまでもなく、完全休養は禁物です。合格の熱気はクールダウンで落ち着かせましょう。疲れ切った心身をほぐし、次のステップへの助走に、さて何をするか、それを考えることもまた楽しいに違いありません。

大学の 宝の山を 掘り当てろ

多くの人は、進学を考えたとき、学びたいこと、学べることを調べ、それなりに理解した上で入学してきたと思います。しかし、市大には、志望の専門教育のみならず、総合教育科目をはじめ様々な基礎教育科目や種々のセンター、クラブやサークルなど、様々な教育環境が整っています。それ故、目指している専門以外にも多様な可能性と選択肢があります。ただ、このことを理解し、積

極的に利用しようと考えている人はどれだけいるでしょうか。

我々教員も、大学での教育は、幅広い教養を身につけ、対話(特に聞く耳を持つ)能力と多様な価値観の中に倫理観を育んだ上で、専門知識に裏付けられた創造性と問題解決能力を習得する「ことに意義がある」というように表現するわけですが、それは耳あたりの良さ以上に難しそうに聞こえるでしょう。しかし、心配は不要です。考えるより行いは易しということも多いものです。もっと気軽に、大学にある宝の山から、自分にあつた原石を見つけ、真の宝に磨いてみてはどうでしょうか。

大学で 双方向を 体験する

大学教育の根本は相互コミュニケーションにあります。高校までの授業は、多くの場合、一方の情報や知識を蓄積させるものと言われます。大学にもそのような授業があつて、それはそれで良いのかもしれませんが、社会で役に立つには十分とは言えないでしょう。何よりも理解が大切であり、理解に基づく知識があれば応用は利くはず。そして、理解は何よりも先生とのコミュニケーションで育まれるものです。言い換えれば、豊かなコミュニケーションは授業の質を高め、信頼が理解を深め、何よりも楽しいはずなのです。楽しいのは何も学生だけではありません。学生諸君の学習する満足感と同等に、あるいはそれ以上に、教育する使命感が満たされることは教員にとつての大きな楽しみなのです。そして、市大の「少人数教育」こそ、学生と先生との対話と相互理解に根ざした教育を容易にしてくれるはずです。是非、自分なりに気に入った先生を見つ

大きく変化しようとしています。

戦後日本の経済発展を支えてきたのは、国民全体の向上心と勤労精神であつたといえるでしょう。学校・企業・官庁などいたるところで、自らの健康さえ投げ打って努力する国民の姿がありました。しかし、その過程で、受験競争が激化して生徒・学生さらにはその親からも思いやりが失われ、企業のならりふりかまわぬ営利追求から深刻な公害や薬害が発生し、政・官・財の癒着による構造的汚職が蔓延するといった事態が進行してきました。現在は、それらの反省期にあります。少子化に伴って漸次受験競争は緩和され、「公害から環境へ」の標語の下に地球環境にまで目を向けた国内外の運動が展開されており、汚職に対する国民の見方も厳しく(もはや必要悪とは評価しないように)なつてきています。もっとも、それに伴つて国民の「やる気」も日々しぼんでいつているように見えます。

最近では、日本の平和を支えてきた憲法を改正しようとする動きが盛んであり、有事立法の整備や防衛庁の防衛省への昇格など、軍国主義化(いつか来た道)の懸念にも理由がないとはいえない状況が進行しています。また、規制緩和の名の下に不寛容で思いやりのない弱肉強食の社会へと移行しつつあるようにも見えます。もちろん、現代は、1940年代とは異なり、すべての国民が国際情勢を含むさまざまな情報にアクセスできる状態にあつて、簡単に世論を操作して国民を総動員できるような体制ではありません。また、唯一の被爆国として戦争に反対する人、あるいは社会的弱者との共生のために身近でボランティア活動に従事して

いる人も少なくありません。いずれにせよ、どうも先の見えない不安定・不確実な時代に入りつつあるようです。

皆さんは、いまや「流れに棹さして」生きていこうとしても、その流れ(大勢)自体が不安定・不確実であり、否応なく「流れに棹さすことなく」生きていかざるをえない状況におかれています。もっとも、そのこと自体を嘆く必要はまったくありません。むしろ自分の生き方を選択し、それに従つて自由に生きることができる時代になつたともいえるからです。そのためにも、ぜひ自ら考えることに徹し、自らの人生観・世界観を持つ努力をしてほしいと思います。大学生生活は、皆さんにその機会と時間を提供しているのです。

私の大学生活

私が大学に入学したのは1965年、皆さんが生まれるはるか前の時代です。私の経験はあまり参考にはならないかもしれませんが、18歳で北海道の片田舎から出てきて京都という都会で大学生活を始めたという点では、幾分か共通する人もいるかもしれません。学生寮に入りましたが、まだ学園紛争(そのピークは1970年でした)の前で、不思議な共同体が成立していました。そこでは、一風変わった先輩たち(酒の(ややムチャな)飲み方からはじまつて様々なことを教えてもらいました。ある先輩は、大きな一枚板(食堂のテーブルの板でした)の真ん中を丸くりぬいてスピーカーを取り付け、オーディオ・セットを作っていました。他の先輩は、アフリカ探検隊での体験を、現地の写真を見せな

けてアプロトチすることを勧めます。

後ろ席 上回生の 特等席？

大学での授業風景を眺めると面白いことに気がつきます。席は後ろから埋まるのです。この傾向は上級生ほど顕著なようです。コンサートでは最前列、映画では前方中央の席を競って奪い合いますよね。ならば、大学での授業で最後列が特等席である理由は何なのでしょう？ 前席で授業を受けた方が、先生の声もよく聞こえるし、黒板の字もよく見えます。何よりも授業を受けた気がして、充実感を味わえるはずです。それなのに、そんな間違っただけで、常識が蔓延するようになったのはなぜなのでしょう？ 遠くの席では顔はよく見えませんが、顔が見えないとコミュニケーションをとることは容易ではありません。是非、前の席から先生と目を合わせる環境を楽しんでみてくれることを願っています。

学生の 真の意見か アンケート

授業改善のために、学生による授業アンケートが度々行われます。学生の立場で、教育カリキュラム、授業内容や講義方法についての意見を申し述べることができるわけですが、それだけでなく、アンケートには学生と教員のもう一つのコミュニケーションの手段でもあります。それだけに、相互理解が不可欠です。それがあってこそ、アンケート用紙に本当の気持ちをぶつけることができます。アンケート用紙を前にしたら、市大ブランドに相応しい授業の実現のために、是非真剣に取り組んでみましょう。自分の意見が、市大の教育を救うくらい

つもりで望んで欲しいものです。そして、そのために十分な時間が与えられなかったら、それこそ先生に話してみよう。それが、本来のコミュニケーションの始まりになるかもしれないから……。

学習で できる説明と 協働

PI (Public Involvement) と言言葉聞いたことがありますか？ これは、市民の参画・協働を意味します。特にまちづくりの領域では、行政を中心に説明責任が問われ、市民には責任を伴う協働が求められています。それには、相互学習に基づく相互理解が不可欠です。相互に学習し、理解してこそ、従来の住民による要望と行政の言い訳的対応では何も生み出されないことを知り得るのです。このことは、何も住民と行政の関係だけに当てはまるものではなく、立場の異なる人の間でのコミュニケーションには欠かせないものです。そのためにも、価値観の異なる多くの人とのつき合いを財産と考えるべく耳とコミュニケーションを大切にしたいものです。大学には、その機会もたくさん用意されているのです。

常識 いつの間にか 非常識？

世の中はめまぐるしく変化しています。IT (Information and Communication Technology) をはじめとする技術革新はその最たるものでしょうか。10年前のポケベルは携帯電話に、マイクロカセットデッキはデジタルレコーダー、種々の重たい辞書は一台の軽量電子辞書に、ウォークマンはデジタルオーディオプレイヤーに代わり、そして何よりも、インターネットが様々なことを大きく変化させたように、

がら夜通し語ってくれました。私自身、小説を読んでいて朝になることも度々で、数人連れ立って徹夜明けの散歩に清水寺まで出かけたこともありました。友人の間で、冗談以外は言ってはならない3日間」といった過酷な試練もありました。

大学では(法学部でしたので)「裁判問題研究会」というサークルに所属し、先輩・同輩たちと裁判や法律の問題について考え、学園祭にパネルを出したり、『裁判』という名の冊子を作ったりしました。こちらは(寮とは大いに異なり)勤勉家が揃っていて、行く度に「勉強もしくなくては」という気持ちにさせられました。授業は、最初の2年間は(当時は教養課程で専門科目はほとんどありませんでした)、出席をとるもの以外には気に入った科目をいくつか選んで出ました。考える時間だけはたっぷりありました。

今思い出してみると、当時が自分の人生や世界についてもっとも深く真剣に考えた時期であったように思います。その後、進路が定まり、教員・研究者という職業についてからは、沢山の課題を抱えているところに新たな仕事加わり、毎日の予定をこなすことに精一杯で、気がついてみると30年以上が経過していたという心境です。途中、留学中に何とか自分の時間を取り戻し、新たな発見もありましたが、基本的な発想は大学時代と変わっていないように思っています(たんに成長していないだけかもしれませんが)。

心の探求

先日、知り合いの精神科医が一冊の著書

を贈ってくれました(熊倉伸宏『心の探求 エビデンスと臨床』誠信書房)。そのプロローグにはパスカルの「人間はひとくきの葦にすぎない」という言葉が引用され、「水面に浮動する浮き草のような人間存在、その不確実性と危うさ、深い懐疑の上に立つ知覚と思考、そのように浮動する水面の『章』である。私』は『心』についていかに『語る』ことが可能なのか。それを本書のテーマとする」と述べられています。私のこの拙文は「アンソニー」一本の章「コーナー」への寄稿ということですが、何を書こうかと迷っているときに丁度この本を読み、何か啓示のように思えて、ここで触れることにしました。そこでは次のように語られています(もちろんここで詳しく紹介することはできません)。

「見ることは『見えないもの』の存在を知らしめることであり、人間科学(理論)はその「残余たる『無限に後退する不在(無窮なるもの)』を知らしめる。日常空間(自然)にある実在の人間は、後者である。観察者自身も観察される対象であって、観察者は観察される自然の一部(無窮)になる自然のなかの一個の微小な粒子)にすぎない。実践家の思考は「意外性の体験」によって理論空間から日常空間へと飛躍させられ、そこに創造性が生まれる。現代の「知」は生の豊かさに関心を持ち「語り」の研究に向かった。そこで実在と真実の多様性に直面し、唯一絶対の「知」の体系に亀裂が生じていることを知った。答えが見えない問いは、その問いが無意味であることを意味しない。「生きる」という問いは、むしろその逆である。「生きる」とことへの究極的な問いが生

ホンの10年の間にその時の常識は変わっていました。

社会では、少子高齢化が進み、医療や年金制度の問題が顕在化し、ひと頃には考えもしなかった事態に、将来への不安が現実的なものになってきています。パブルは弾けたにもかかわらず、起業や投資のブームは根強く、一時は成功者として社会の寵児であった人たちが勇み足で逮捕される始末です。国や地方自治体の負債は膨らみ、潰れるはずのない自治体がまさに倒産の危機に瀕しているのです。

大学でも、4年一貫教育の名句の下、1つの間にか教養部が無くなり、何となく縦割りに近い形態に落ち着き、何とも忙しない半単位のセメスター制度が定着するに至っています。そして、気がついてみたら、大学の合併・吸収が進み、国公立大学も法人化されています。教育に対する設置者の理念が揺れ動けば、この傾向はさらに進むかもしれません。そう、今までその存在が当然のことであったにもかかわらず、近い将来、無くなる学科・学部や大学が出現してもおかしくない状況なのです。

そんな、変化の激しい時代であればこそ、大学時代に自分を磨き、変化に動じないしつかりとした考えを身につけて欲しいと思います。そして、世の中が変わっても不変である人とのつながりを築けることを祈りたいし、応援したいと思っています。

塞翁が 馬の如く 先を読む

一言一憂。それもまた良しとしたいところですが、できることなら、置かれた状況をポジティブに捉え、少しでも先を見据え

てみたいものです。それには、他の人とはべるような相対的価値観から脱却しなければならぬし、良くも悪くも、なぜそうだったのかを顧みて、次の一步を考えなければならぬでしょう。それだけに、私の好きな言葉、「温故知新」と「塞翁が馬」の組み合わせの実践を、みんなにも是非勧めたいと思うのです。

命名は 遊び心と やる気産む

これまでに、並べてきたキーワードには五七五の遊び心があったことに気がついてくれたことと思います。最近、交通バリアフリーの基本構想づくりや都市づくりの支援で勤めているのが、組織や活動への命名なのです。自分たちが気に入った名前やキーワードをつけることで、愛着も湧くし、なによりもやる気が起こるものなのです。というわけで、ここまで11の苦心(?)の五七五キーワードと短文を紹介してきました。さて、何か興味の湧く事柄はあったでしょうか。また、自分なら、もっと上手く表現できるのにと考えるキーワードを思いつきましたか。考えてみると意外に難しいのですが、気の利いたキーワードと内容を思いついたとの一報を心待ちにしています。何よりも、何事にも興味を持てること、君たちの力なのだから。

日野 泰雄(ひの やすお)

1951年生まれ

現在、工学研究科都市系専攻・工学部都市基盤・学科教授
専攻分野/土木工学・交通計画
担当講義/大阪の都市づくり(分担)・技術と環境(分担)

きている「この究極的なエビデンスとなる。

このように語ったうえで、ふたたびパスカルに戻り、『考える章』の思考には人間誕生から繰り返された『人間についての問い』があった。不可能な問い、永遠に回帰する問い。大きな車輪が回転し続ける」とさわれています。本書は、いわば著者の「心の旅路」ともいえる書物であり、同時にそれがボストン実証主義におけるエビデンスの探求という現代的課題に答えることにもなっています。著者が学生時代にネコの脳からインパルスを拾う実験をしていて、「この実験とお前が求めていた心の研究にどのような関係があるのか」と問いかけるもう一人の自分を感じるという奇妙な感覚に襲われたことに始まった問いが、40年の研究を経て本書に至ったとされています。自分に問いかけるもう一人の自分という感覚は、皆さんにも覚えがあるかもしれません。その後の展開は、著者の職業(臨床家)と深く関わっています。私としては、とこどこで、私も大学時代にそのように考えたことがある」と思いつつ、どこで私は思考を停止したのかと反省もさせられました。

大学時代に深く考えることが、その後の人生を左右することになります。深く考えるほど、人は他者に共感できるようになり、寛容で謙虚になりうるからです。先に自らの人生観、世界観を持つ努力をしてほしいと書きましたが、実は結論は出なくてもよいのです。

時間や宇宙と同様に人間は無窮の存在です。結論が出ないことは最初から分かっているともいえます。また、深く考える

というのは決して閉じこもって独りで考えるという意味ではありません。先輩や仲間との会話・討論、読書やクラブ活動など、あらゆる機会を通じて考えることができます。本学の全学共通科目は(私の学生時代とはかなり異なり)考えるための素材の宝庫です。ぜひ授業にも積極的に参加してください。

浅田 和茂(あさだ かずしげ)

1946年生まれ

現在、法学研究科(法曹養成専攻)・法学部教授
専攻分野/刑事法
担当科目/環境と法・行政・生命と法

《編集後記》

今回から、『大学教育だより』(第4号)と『アンソニー』(第8号)を合冊として発行し、内容を一層充実させるとともに、従来以上に幅広い皆さまに両方の冊子を読んでいただくことをめざしました。

『大学教育だより』では、商学部生による看護学科訪問インタビューをはじめとする、各種コーナーで、本学の学生の学びや教員および大学の熱心な教育の取り組みについて紹介しています。日頃、ともしば自分の関係する部局以外の取り組みについて知りあうことが少ないなか、本誌が、互いの理解を深める機会となると同時に、それを通して自分たちの取り組みについても振り返り、自らを改めて理解しなおすきっかけとなれば幸いです。

また、『アンソニー』では、本学の教育に長年、熱心に取り組んでこられたお二人の先生が、新入生を中心とする学生の皆さんへの思いを言葉にして下さっています。じっくり味わって、充実した大学生活の道しるべとしていただください。

大学教育研究センター